

研究奨励賞ができ、その第1回受賞者は、当時但馬の関宮中学校にお勤めの西村登先生でした。その後、西村先生は水生昆虫の研究により京都大学より理学博士の学位を貰われた篤学の方であります。その翌日、洲本市の三熊山で植物観察会があり、島外からも多くの参加者があり大変盛会でした。その時の講師が室井紳先生で、先生の未だお若い頃でした。

その時の先生の表情は実に澁刺として輝くようでした。参加者からつぎつぎの質問にてきばきと答えておられたことが懐かしく思い出されます。室井先生に初めてお目にかかったのも、この総会の時で、当時農学博士の学位をとられ大変高名な先生でした。

私が県立三原高校へ転動したのは、健康上のこともさることながら島内には至る所のため池があり、私の研究分野の淡水プランクトンの研究ができること、三原高校には生物学の大家、槌賀安平先生がおられ、直接ご指導が得られるなどが主な原因で、自分から進んで転勤を希望しました。私が三原高校に在職中の5年間を通して今でも最も強く印象に残っているのは槌賀先生との出会いです。私が三原高校へ行ったときには、すでに78歳を越えておられましたが、毎日自宅から片道5kmの道を歩いて通っておられ、途中植物を採集され『一日一草』を実行しておられました。先生の教育方針は一貫して①勤めて自ら研究せよ ②精密に実験観察せよ ③正確に思考せよ の三つであり、これは自然科学を学ぶ上では最も大切な基本であります。

戦前、先生は三重県の中学校・師範学校に永くお勤めでしたが、三重県時代の教え子から有為の人材が多数出ております。戦後、先生が三原高校で教鞭をとられてから、三重県の多くの教え子たちが拠金をして、先生に研究室を送られたことは有名な話で、先生がいかに多くの教え子から敬慕されていたかを物語るものであります。先生は名利を求めず「努力し、さらに努力する人生」を自らの教えとして実行され、高い人間愛に基づいて、教育の実践と信念に生きた偉大な教育者であったと思います。

私は先生から学問のこと、教育のこと、そして人間としての生き方について多くを教えられ、先生の教育と学問に対する真摯なお姿に深く感銘し、淡水プランクトンの研究に力を注ぎ努力しました。

淡路島のため池のプランクトンを調査する間に大型のヒゲナガケンミジンコ属の仲間であつと変わった種があり、種名はシノヒゲナガケンミジンコとっておりますが、世界で未だだれも研究していない種であることが分かりました。この属の仲間は20種以上ありますが、雌の背中に突起があるのはこの種だけで雌雄の判別が容易でした。この種の日本における分布や外部形態の季節変

化と生活史などについて三原高校に在職中にほぼ明らかにすることができました。当時飼育実験や野外観察を中心にやっておりましたが、次々に新しい発見があり、とにかく研究がおもしろくてたまらない時期でした。今考えてみて、私の人生の中では最も充実した40歳代であったと思います。研究の成果は『兵庫生物』に発表させていただき、参考論文が増え、大変助かりました。

兵庫県生物学会は、先輩のおかげで地方学会では全国でも有数の学会と自負しておりますが、普通の場合、中央の専門誌にいきなり発表しようと思っても、研究内容とか研究成果、論文のまとめ方などの規定が厳しく、私の体験からよほどしっかりした論文でないと編集委員会を通ることが困難と思います。一応地方の学会で論文のまとめ方などをしっかり勉強してから中央の専門誌に投稿されることをお勧めします。

私は、昭和43年4月に県立三木高等学校へ転動しましたが、研究は三木高校で完成し、母校の北海道大学へ学位を申請し、昭和51年2月、水産学博士の学位を得ました。50歳の時でした。私は、兵庫県生物学会へ入会して30年余になりますが、この学会へ入会してよかったことは、自分の研究分野での情報はもちろんですが、その他の情報交換が容易であったことと、もう一つは多くの会員の方々との交流ができたことであり、そして、その交流の絆は結構強かったと思います。

兵庫県生物学会が、創立50周年を迎えようとしております。これを契機として会員の方々が一致協力して当学会が益々発展することを心から念願いたしております。

終わりになりましたが、この度任期満了(4年間)となり、新会長平畑政幸氏と交替することになりました。会長在任中は役員はもとより会員の方々のご協力とご支援により無事任期を果たすことができました。心から厚く御礼を申し上げます。(とみかわ てつお:顧問)

『兵庫生物』と50年

高橋 壽郎

1947年、明石で兵庫農大の森為三氏を会長に兵庫県生物学会が発足した。その年の10月1日、わたしはロシア・カザック共和国ウスチカーメンゴルフスクから、まる2年間のいわゆるシベリア抑留生活を終え、ナホトカから函館経由舞鶴に帰国した。兵庫県生物学会へは、恩師室井紳先生(県立第二神戸中学校で3年間、博物を教えていただく)にお願いして入会した。

機関誌『兵庫生物』の創刊号が出版されたのは1948年3月である。わたしの報文が初めて『兵庫生物』誌上に発表できたのは Vol. 1, No. 5 (P. 95, 1951)であった。その時、『兵庫生物』は今後大いに発展する会誌で

ある、したがって、この会誌に毎号最低一編の報文の発表を考えた。おかげで Vol. 10, No. 5 までに58編の報文を発表させていただいた（この考えは現在も継続している）。(参考、わたしは、昆虫に関する報文を各会誌とか単行本、その他に出しているが、その数が1994年末で587編に達している)。兵庫県生物学会は、県下の高等学校の先生方が中心の学会で、わたしのように全くのアマチュアで、ただ単に「虫が好きだ」といった会員は大変少ないように思われる。

機関誌『兵庫生物』は、この50年間各巻平均して308ページとなっているが、第5巻の452ページ、第3巻の437ページと大変多くの報文が発表された巻もあれば（その中でも第6巻、第2号と第3号の間に特別号として151ページの大冊『兵庫県植物目録』が発行されている）、第10巻になると平均にも足りない225ページになっている。その間、虫についての報文は、各巻平均17編あるが（こちらも、Vol. 7が26編、Vol. 3～6が各20編以上の報文がある）、第10巻になると9編に減少する。

これからの『兵庫生物』はどのように発展するのか、兵庫県の生物を中心にした研究調査の結果の発表の場として、おおいに発展してもらいたいと同時に「虫」についてのすぐれた研究発表を期待しているものである。

(たかはし としお：常任理事)

『高校生物ハンドブック』発刊の思い出

内波 秀一

昭和30年代ころから、自然科学のあらゆる分野での大発展の影響による生物教育の教育課程の大変革がおこり、兵庫県生物学会の会員研究、研修活動が盛んになっていった。

研究誌として伝統と権威ある『兵庫生物』のほかに、高校教育研究会の『生物部会誌』を発行し、教員研修をめざした「現代生物学ゼミナール」も大学教授を招いて年に4～5回も開かれるという状況になった。

当然、活動のための基金をどうするかということが大きな課題となり、渋谷久雄先生（明石高校）を中心に県生物学会の事業として、問題集の発行、あるいは、生物実験書の発行が企画されて実行にうつされたが、県下全域の先生方の参加を得られずに数年で中止された。

一時は京都の教研出版社の問題集を兵庫県内版としてつくり、販売部数に応じて生物学会へ寄付していただくという苦肉の策もとられた。

昭和37年にわたしが県立夢野台高校に転勤し（当津先生が在勤中）昭和38年2月ころだったか、学習のまとめ編、問題編、実験編を一つにし、巻末にノーベル賞級の生物学史の紹介をのせて『高校生物ハンドブック』と命

名する本を出版する企画がまとまり、編集長を当津先生、会計担当をわたくしがということで実施することに決定した。

初期の編集委員として熱心に出席された先生方は兵庫高校（室井 綽、岡村はた、近藤昭一郎）、長田高校（安房 明、前田米太郎）、葦合高校（渋谷竜二、東 敏男）、赤塚山高校（小久保富男、浜田史郎）、須磨高校（東 克彦）、明石高校（渋谷久雄、西敦義）、加古川東高校（杉田隆三、伊藤幸夫）、加古川西高校（金沢 竜）、そのほかの先生方であった。編集長から各高校へ趣意書を送り原稿を書く依頼を重ね、段ボール箱数個の原稿が集まった。編集委員が分担して執筆し、昭和39年が初版だったと思う。1冊定価150円で1万冊余り印刷し、見本を送り、注文をとると1万冊突破、あわてて5千冊の増刷を依頼し間に合わせたことを思い出す。

それからは毎年、小改訂（訂正、問題のさしかえ）を行い、3年ごとに大幅改訂を行なうために、県下全域の先生（特に採用校）に案内し、須磨国民宿舎で反省会を開いた。編集委員会議は9月、10月の日曜日を利用して、会社の寮を借りて開かれ、本当に良い勉強会になったと思っている。

昭和42年ころは最盛期で2万冊をこえる発行、高校部の運営費として本部会計へ毎年約30万円の納入（高校部会でも一部利用）ができた。

その後、各出版社が、それぞれ、カラー版でみごたえのある問題集を出版しはじめ、兵庫県生物学会編の『高校生物ハンドブック』の売れ行きが低下していったが、事業の収益もさることながら、まとめ編、問題編、実験編の検討を通じて、会員相互の研修が大きな成果であったと思っている。（うちなみ ひでかず：常任理事）

“現代生物学ゼミナール”誕生・発展・終焉

安房 明

30年ほど前だっただろうか……『『生物物理』』という雑誌を書店で見かけるようになりました。……（略）……新造語（？）が生物学の中にもふえて来て、めまぐるしいほどです。日く分子生物学、日く人間工学 etc.……生物学そのものが超スピードで進んでいるようです。毎日まいにち、生徒相手の神経の疲れる仕事にたずさわっている私達教師には、新しい生物学の動向を身につけるとまがありません。しかし、少なくとも科学について関心を持つ私達としては、現代の科学の状況を正しく把握する必要があります。少しでも正しい把握をして正しい科学概念を生徒に伝えるのが、私ども理科担当者の責務だと思いますが、なかなかそこまで行かないのが現状です。このようなことを考えれば考えるほど、生